

川筋の变迁

天竜と三峯川の場合

唐沢和雄

目次

はじめに	4
一、江戸時代の伊那大橋の位置	4
二、伊那大橋より上の天竜川筋	6
(一) 元禄以前の川筋	6
(二) 元禄以降の川筋	8
(三) 文化年間の川筋	8
(四) 幕末までの天竜川本流のこと	10
三、伊那大橋上の掘川工事	11
四、伊那大橋より下の天竜川筋	14
(一) 大橋下の掘川工事	14
(二) 四日市場流失のこと	16
(三) 古町村、荒井耕地の水争い	17
(四) 狐島耕地荒井耕地の水害後の申し合わせ	18
五、殿島橋付近の天竜川筋	20
(一) 殿島橋付近の景観	20
(二) 小出島の氾濫と集落移動	20
(三) 鍛冶ヶ島村の流失	22
(四) 田原村新田の流失	22

六、三峰川筋の移動……………	23
(一) 三峰川扇状地のなりたち……………	23
(二) 川手村天伯社付近の湿地帯……………	25
(三) 三峰川沖積地の横断面……………	25
七、古三峰川筋末端の景観……………	25
八、ダム建設後の三峰川筋の現況……………	26
おわりに……………	27
図1 三峰川合流付近の天竜川と集落位置図……………	4
図2 伊那大橋上下流の川筋移動図……………	5
図3 天竜川端山寺区の地名図……………	8
図4 嘉永元年大橋下川筋変更絵図……………	14
図5 文化五辰年古町村四日市場流失絵図……………	16
図6 狐島村水害図……………	19
図7 殿島橋上下流の川筋移動図……………	20
図8 小出島の氾濫と集落の移動図……………	21
図9 殿島橋下流の天竜川筋切れ込み図……………	23
図10 三峰川沖積地横断面……………	24
図11 古三峰川の末端と西町平地……………	25

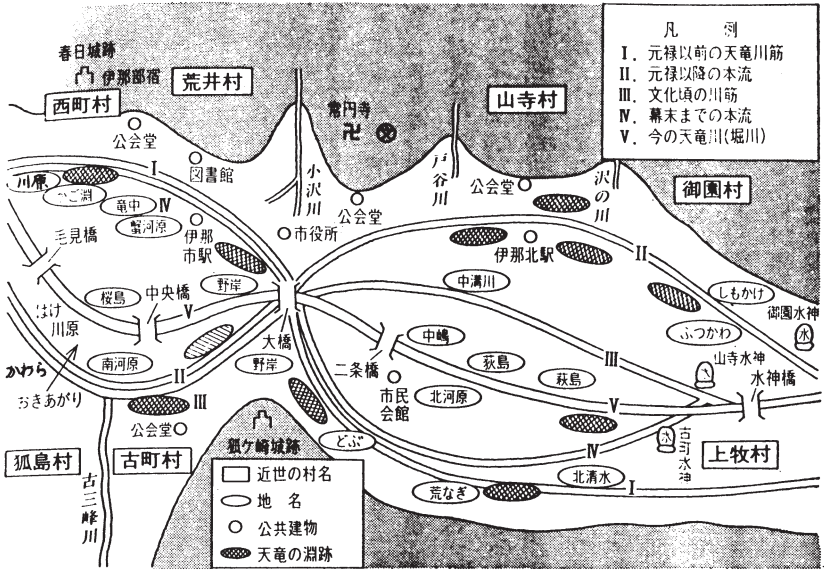


図-2 伊那大橋上下流の川筋移動図—伊那市史より転載—

橋、同じく箕輪町の木下から三日町への橋、同じく伊那市の西伊那部から東伊那部への橋の三橋だけ。

享保元年（一七一六）作成の「高遠領郷村絵図」でもこの三つだけで東西交通の最も重要な役割を果たしていたことを示しています。

橋の構造などを示す図面は現在残されていませんが、寛保三年（一七四三）に高遠藩士、小山林盛が主命によって描いた「天竜川鶴匠の図」にある伊那部大橋の図などから、木材を組み合わせて大きな枠をつくり、その中に石を詰めて川の両側と中央に沈め（現代の橋の橋脚に当たるもの）その上に橋桁を渡し、さらにその上に簀子板を並べたものと推定されています。伊那部大橋の位置は、現在の伊那大橋より四、五十メートル上流にかけられていました。東は中央区旧道を経て高遠に通じ、西は坂下区（山寺村の分村）を経て伊那部宿に通ずる間に架けられていたと記録されています。

当時の天竜川本流は、現在の水神橋付近から左に大きくカーブし、現在の古川とほぼ同じコースを通っており、二、三年ごとの洪水で橋が流失し、その度に地元民はその負担を高遠藩から強いられたり、護岸工事をめぐって、両岸の古町村と山寺村が対立した記録が沢山残されています。明

治六年に官營の護岸工事が完成し、水神橋と大橋間の天竜川が現在のように河川が直線に改修されたことから現在の位置に大橋が移され、永久橋に架け替えられました。

江戸時代の橋の跡は、昭和五十年、たまたま上流の二条橋の架け替え工事に伴いブルトーザーで川底をさらっていたところ、江戸時代に橋があったとされていた場所から橋脚や橋台に使用されていたと見られる丸太棒が何本も出てきたことから確認されました。

二、伊那大橋から上の天竜川筋

(一) 元禄以前の川筋

元禄以前の川筋は、次の文書によると、東寄りの古町村側を流れていたこととなります。即ち、山寺村側には段丘上からの三支流の押し出しがあつて、天竜川本流を東に押し出していますが、古町村側は押し出しもなく低湿地の凹地で不毛の地でした。

乍恐以書付奉願上候御事

私共村方川原先天竜川流ノ儀元禄三年御検地以前ヨリ御

園村下上牧村新田ヨリ古町村北荒ナギ前通り川筋ニ御座候則私共方荻島向通り上牧村与左衛門新田杯ト申場所都合宜敷クヨツテ当村へ買受ケ所持罷在候 其外古町村御田地杯モ買受ケ所持罷在候得共其後追々川筋欠ヨリ當時ハ一流私共村方先通り大橋迄川筋ニ罷成年々御田地水入ト相成其上近年川除モ一ヶ年二三、四度宛任別而御上様御苦勞筋ト相成猶又大小ノ百姓一同困窮弥増難澁至極ニ奉存候 一体川筋地盤高キ故田地多分水入深田ニ相成場所ニヨリ地底ヨリ水湧出シ稲作年々スクミニ相成候儀先年ト田地ノ位大キニ相違仕 免附ノ御田地所持仕候百姓必至ト行詰難儀仕候者数多御座候 何共嘆敷儀ニ奉存候 何分恐入候得共又々出水ニモ候へハ一圓此方川筋ニ相成可申難斗奉存候 左候得ハ前文ノ通り御田地水入沼田ニ相成候儀乍恐目前ニ存候 何卒御園下ニ而此方川筋ヲ切リ往古ノ川筋へ不残水流行候様奉願上候 一体北清水通りハ亡所ノ地又ハ地窪ニ候得ハ少シノ出水ニモ当村御田地ハ不申及古町村北河原御田地開発仕候所水押可相成候 何卒以御慈悲御見分被為遊被下置願之通り被仰付被下置候ハバ大小百姓一同難有仕合奉存候 以上

文化五辰年 二月

山寺村組頭

仙藏

太吉

弥三右衛門

名主

伝右衛門

松井忠兵衛様

山下芳右衛門様

「私どもの村の川原先の天竜川は、元禄三年御
検地以前から御園村下、上牧新田より古町村北
荒ナギ前通りが川筋でございました。私共の荻
島向通り上牧村与左衛門新田などという場所は
とても都合がよい場所なので当村へ買受けて所
持しております。そのほか古町村田圃など

も買受け所持しておりましたが、その後だんだ
んに川筋が欠けこんできて、当時は枝流れが私
どもの村の先を通り、大橋まで川筋になってし
まい、田圃は水につかり、そのうえ一年に三、
四度も堤防の工事をして頂いておりますが、百
姓たちの生活は困難さが増すばかりでございます
す。一体、川筋のほうか田圃より地盤が高いた
めに沼田になり、場所によっては水が湧き出し

冷たいために稲が育ちません。以前より地味が
悪くなってしまったために、このままではお年
貢をお納めする百姓たちの多くが行き詰まって
しまうのは必至でございます。また出水でもあ
れば、こちら側に川筋が来て水入り沼田になる
のは目に見えております。なにとぞ、御園下で
こちらの川筋を切切り、昔流れていた川筋へ流
れて行くようにして頂きたくお願い申し上げます。
す。一体に北清水のあたりは凹地で、当村の田
圃はもちろん古町村の新しく開発した田圃まで
少しの出水でも水が押し寄せます。どうかお調
べになって願書の通りお聞届け下さい。」

この文書に見るように、その古い川筋は古町村の段丘下
を流れてきて、今の古川筋から入船に出て、通り町・春日
町に向かって流れていました。その証拠となるものを三つ
上げてみますと、一つは中央区の公民館の辺りはドブとい
う地名で十メートルほどの深い淵跡があること、二つは、
入船町の征矢さん宅、写真館の畑さん宅などの地下は、そ
の頃の天竜川の河床であること、三つは西町の地名に上竜
中・下竜中・上沼・カゴ淵があつて、これらを結んでみる

と昔の天竜川筋を考えることができます。

(二) 元禄以後の川筋

次は、元禄以降の川筋のことですが、天竜川の本流は御園村水神碑の辺から切れ込んで今の電車線路を中心にして、山寺段丘の市街地を流れて、御舞瀬村にでて古町村、狐島村に向かっていたといわれています。古老の話によると、双葉町一帯は明治の初め頃まで一軒の家もなく「ふっ川」という地名で、温かい清水の出る深い淵跡が残っていて、水泳も出来たし、魚捕りもしたし、懐かしいところだったといえます。

また、最近になって山寺公会堂建築の時に、地下工事現場から沢山の牛柢が出たことや、伊那宮林署貯木場の消火栓取り付け工事にも牛柢が出ていることなどは、当時の天竜川本流の東西の沈床の位置と、川幅を示す証拠となるものです。伊那北駅東側の凹地は長い間湿地と沼地で、赤腹のイモリが住む淵跡が残っていました。この本流は、御舞瀬村で蛇行して古町村・狐島村へ向かっていました。

(三) 文化年間の川筋

次は、文化年間の川筋ですが、今の山寺区水神橋のそば

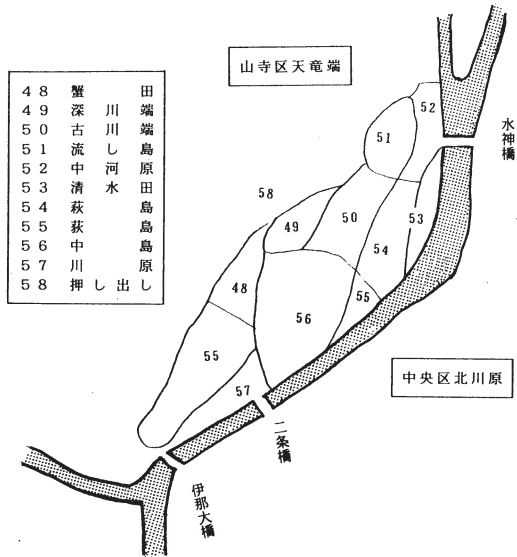


図-3 天竜川端の山寺区小字

にある「水波能売神」という石碑の辺から切れ込んで、中溝川の辺りを天竜川本流としたことがあります。この川筋に沿って、古川端・荻島おぎしま（現市営中央病院辺り）、中島（二条橋の西側）などの地名が残っています。今の中溝川は二条通りから下流は暗渠になっていて、大橋付近で現天竜川に放流されていて、この暗渠の上は舗装道路で、両側は飲食街となっています。(二)と(三)の川筋が永い間山寺側を流れ氾濫するので、荒れ田・沼田が多く、山寺村の百姓は丸木

橋を架けて島の向う側に出作りし、御年貢収めが苦しいから「天竜川本流を往古の川筋にしてほしい」という陳情書を幾度も高遠藩に提出しています。これに對して、古町村側の被害も大きいので、年貢をまけてくれとの陳情書をこれも何回も出していきます。

古町村の出村、四日市場の流失については後の項で書くことにします。

ここに幕末頃の天竜川氾濫に関する狂歌があるので紹介しておきたいと思います。

ふるぎつね 山寺下を海にして
あら恐ろしや いま出て見れば

「ふるぎつね」とは、古町村と狐島村の百姓たちのことを指しています。山寺下とは戸谷川・中溝川が合流している御舞瀬村一帯の低地のことで、当時は山寺村に属していました。「あら恐ろしや」の「あら」は荒井村のことです。

「いま出て」とは段丘上にある伊那部宿のことで、天竜川の満水を高みの見物のできた場所なのです。

氾濫の天竜川を挟んでの五ヶ村（古町村・狐島村・山寺村・荒井村・西町村）の水争いをたくみに織り込んでの狂歌なのです。

為取替證文之事

古町村中島地追々不残流失山寺村地所年々荒地田地水入等多分有之難渋ニ付双方御見分相願両奉行様並御代官様御見分之上山寺村荻島御川除場ヨリ古町村荒ナギ江見通シ〆切り御川除八十五間被仰付普請之儀ハ山寺村ニ而致シ候様被仰渡双方御受仕候 右〆切ヨリ引続川端二百十二間東川岸迄山寺村ニ而向後川除致候 無怠懸小破之内繕等可致夫ヨリ下ノ川除ハ古町村ニ而可致普請様被仰渡双方奉畏候上ハ御普請成就候ハバ井筋馬入筋村境等之儀無故障誤仕以來違失致間敷候為後日取替證文仍如件

文化五戊辰年八月

古町村御役人申

山寺村名主 伝右衛門

組頭 彦治

同断 太吉

長百姓 弥三右衛門

(右と同文同年月のもの)

古町村名主 直右衛門

組頭 茂左衛門

同断 安左衛門
長百姓 縫右衛門

「古町村の中島というところは、洪水のために

段々に流されてしまい、山寺村も荒地地や水入りの田圃が多くなって困っております。双方から調査して頂くように願ひ出て、お奉行様と御代官様が御見分になり、山寺村の荻島の川除場から古町村の荒ナギを見通した線で八十五間の川除を作り、工事は山寺村がするように仰せ渡しになり双方がこれをお受けしました。このべ切りから、引き続き川端の二百十二間の川除を東川岸まで山寺村が行ない、怠りなく小破のうち繕うよう、それより下の川除は、古町村にて行なうよう言い渡され、双方がかしこまつてお受けしました。工事完成の暁には、井筋、馬入り筋、村境など問題の起らないように致します。後々のために證文を取り交します。」

(四) 幕末までの天竜川の本流のこと

この川筋は、図2のⅣのように荻島堤防より古町村側段丘

下の北清水から荒なぎ地籍にはいり、沼田とか、どぶという地籍（現在の古川筋）を流れて、入船地籍につき当たり、錦町通りに深い淵を作って春日町恵比須神社付近を通って西町川原に出ていたものです。

現在の天竜川（掘川）の川底から旭座裏にかけての一带は古町村の水田であり、字野岸という地名が今でも現天竜川の両側に残っています。明治時代のこの辺の土地争いのことが荒井村区誌に載っています。また、幕末迄の旧大橋の位置は、現在の大橋と二条橋の中間の「和天地」の石碑の辺から坂下区入船駐車場の中程にむけて架けられていたことが絵図に残っています。これらの詳しいことは後から述べることにします。

この本流も文化・文政時代から幕末迄の長い間氾濫をくりかえし、古町村側に大きな被害をもたらし、更に御舞瀬村・荒井村川原にも損害を与えていました。古老の聞き伝えによると、天竜川増水のときには、荒なぎをはじめ所々の段丘は崩れ落ち、「どぶ」の淵は濁流が渦巻いて、北河原一帯は湖水となって、その満水は民家の軒下に打ち寄せていたそうです。

前にも述べました通り、天竜川氾濫のたびに、山寺村・古町村から川筋変更の陳情書が代る代る提出されてきまし

たが、東西に蛇行する川筋を整えることは容易ではありませんでした。そのため増水期にはそれぞれの村で、本流の分散策としての、切り普請を勝手に続けていたのです。古町村地元文書の中の大部分はこのための「人足出払い控え帳」なのです。

藩では、代々の御普請奉行が増水期の見分を行なつて掘川案を考えていたようですが、ついに亡村にもなりかねない古町村から藩の最高幹部の内藤彦左衛門、内藤与平の二方にたいして直接訴え状を出し、ようやく明治元年（一八六八）「堀川裁許」の書付けが下されたのです。

この裁許状を古町村は直ちにお受けしましたが、山寺村は承知しなかつたために、上を恐れず不敬不埒至極ということで、山寺村の責任者が大勢罰を受けることになりました。

一、手鎖入牢者

六人

一、名主職とりあげ 村へ押込

御園村 治兵衛

野底村 才治が越名主

一、役場立合者村押込

四人

しかし、翌年掘川工事が予定通り施行されることになった

ので、咎とがの者もその年のうちに全部お許しが出ました。

掘川北西の堤防工事は、御園・山寺・御舞瀬の三ヶ村が分担し、掘川南東側の堤防工事は古町村で分担することになりました。この掘川工事の古町側を「おおどて」といい山寺側を「どて八丁」といって、大石を詰めた木枠の堤防が今の水神橋から大橋まで続く大工事でした。河川敷となつた潰地は

御園村

四反弐畝

山寺村

三町六反弐畝

御舞瀬村

四反五畝

上牧村

一町四反六畝

古町村

一町三反

などで、この分は最寄りの村々で替え地などしたようであります。

三、伊那大橋上の掘川工事

前にも述べましたように、蛇行する天竜川の氾濫に、山寺村・古町村の住民は苦しめられていましたが、その都度両村から藩に対して陳情書が出されていきました。

慶応四年が九月で明治と年号を改めた年、ようやく高遠

藩は両村の真ん中に新しく堀川を通す裁定を下し、この大工事に手が付けられたのでした。日の丸の御用旗を立てての突貫工事で、「おおどて」や、「どて八丁」はこのとき出来たもので、木枠の堤防や沈床が延々と続く大工事でした。

天竜川模様替裁許之事

古町村字荒な起通天竜川年来

流連来候處年増ニ欠崩連当節ニ至

弥以人家際迄瀬筋打寄此上洪水

之節者人家ニ相障可申体甚安心難成段

不忍見既ニ文化年中迄ハ山寺村字

荻島筋通水之處同五辰年右村

依願當時之川筋江模様替申付候處

其砌古町村ニ而茂彼是難洩嘆願

有之候得共嚴敷及利害申付候

夫以来同村田地山寺村地続ニ

多分有之数十年来耕作いたし

来候得共大河を隔り候事故満水

之節者水防手当方不行届彼是ニ而

近年必至与難洩いたし候趣ニ付

此度元之方江天竜川猶又模様替

申付候を山寺村ニ而彼是難洩強情ニ
申立候節者無之處格別之

御慈悲を以利解人差加へ双方共

及糺難洩嘆願之廉茂承届

川幅之義茂得与勘弁差加へ

夏中見分之節も毛川岸東の方へ

引下ケ尔談可申様立入之もの共江茂

為取扱候をも弁無之殊ニ古町村

地所之内多分堀川申付候上者冷水

染出シ可申与見越し難洩不被留義を

只管申立候得共此義者取揚可申筋ニ

無之依之立入人共より割出し及沙汰

候之通見通し佐いかちより東之方江

拾式間よせ西川岸より定め夫より

川除堤五間除キ川幅參拾八間東之方

川除堤西同断相定免切堀川

大橋中枠を中墨ニ見通し全

三拾間幅ニ深掘可致様急度様急度

申候間其旨相心得可申候此度

新規堀川申付候上者向後双方

村境川除者其村々ニ而精々

嚴重手当可致尤川北之所者

川除間敷是迄之振合ニより

御園村山寺村御舞瀬村三ヶ村

分割を以可申付南の方ハ古町村ニ而

川除可致者勿論之事ニ候上牧村

御園村御舞瀬村地損有之分ハ其

最寄ニ而替地可申付候且上牧村より

冷水流連者は迄之通古町村地所荒な起

筋を相通し可申候右裁断早ニ而双方へ書

付渡置条永不可違失者也

明治元戊辰歳十一月

與兵衛 印

孫四郎 印

嘉兵衛 印

「古町村字荒ナギのところの天竜川は、年々土手を欠き崩し、最近では、ますます人家の際まで瀬筋が寄ってきて、危険な状態になってきた。文化年中は、山寺村の萩島のところを本瀬が流れていたが、山寺村の願いによって、川筋を変更するように申し付けたところ、古町村からい

ろいろと故障を申し立てたので厳しく説得してきた。それ以来、古町村の田圃が沢山に山寺村の地続きになり、川を隔てて耕作にかよふために、洪水の折など水防の手当も行き届かず、田圃が荒れて困っているようなので、天竜川をもとの川筋へ模様替えしようとしたが、山寺村が強情に反対するので、これをなだめ、川幅も、夏に調査したときより東のほうへ川岸を下げるようにしたところ、古町村の立ち合い人は、古町側へ川を寄せられては、冷水がしみ出して困ると申し立てたが、この願いは取り上げず、計画書の通り、見通してサイカチから東の方へ十二間寄ったところを西の川岸とし、川除堤五間を取り、それから東の方へ川幅三十八間を取り川除堤は西岸と同様にする。

大橋の中柱を中心点として見通し、三十間幅に深掘りするように申し付ける。このように新規に掘川を申し付けたからには、双方で村境や川除など精を出して手入れするように。川除の見廻は、川北のところは今までの通り御園村・山寺村・御舞瀬村で分割し、南の方は古町村が

するのは勿論のことである。上牧村、御園村、御舞瀬村で提供した地所の分はその近くで替え地を手当せよ。また上牧村から流れてくる冷水については、これまでの通り、古町村の荒ナギを通す。このように裁断を終わり双方へ書き付けを渡し置くので紛失せぬように。」

四、伊那大橋より下の天竜川筋

(一) 大橋下の掘川工事

天竜川本流が伊那大橋をぬけると、西側からの戸谷川・小沢川の押し出で、古町側や狐島村に水害が及びました。それだけでなく、荒井村・西町村の段丘下の水田作りは非常に不安定なものでした。それで、荒井村・西町村と古町村・狐島村との間には絶えず水争いが繰り返されてきました。その陳情に答えて、高遠藩は小沢川の洲さらいと往來橋（今の明十橋）作りに併せて新しく掘川工事を指示しました。ここにその当時の図面と記録がありますので、少し説明を加えたいと思います（図4）。

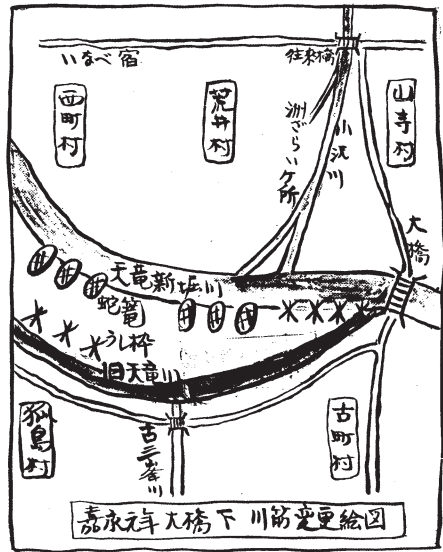


図-4 嘉永元年大橋下川筋変更絵図

嘉永元年大橋下図面（古町村資料）
 一、今般小沢川渡之儀ニ付村々難渋之筋奉願上候所被為□ 大御見分被下置天竜堀川（天竜川）切り小沢川渡者二筋ニ御立御普請被下置此後小沢川渡洲浚観定之通此度御普請図面堀川之内危所江 其村々ニ而蛇籠ニ而欠留可致候右御普請皆出来絵図面ニ仕立五ヶ村役人並世話筋之者致連印村々ニ而一枚ツツ致所持後來双方絵図面并観定書相守争論申間敷候 為後日仍而如件

嘉永元戊申年 十一月

古町村名主 新三郎

代判 和兵衛

組頭 勝右衛門 嘉十

世話 喜左衛門 伊右衛門

忠三郎 彦藏

荒井村名主 孫兵衛

代判 太左衛門

組頭 小伝治 多兵衛

世話 祐右衛門 兵藏

利右衛門 庄藏

狐島村名主 伝兵衛

代判 若兵衛

組頭 八右衛門 忠藏

世話 芳右衛門 嘉左衛門

長次郎 覺之丞

西町村名主 吉五郎

代判 縫左衛門

組頭 庄兵衛 久右衛門

世話 太左衛門 孫左衛門

新兵衛

山寺村名主 三右衛門

代判 孫左衛門

組頭 繁右衛門 重三郎

茂平

世話 重左衛門 清右衛門

「この度、小沢川渡のことで陳情申し上げましたところ、調査に来て下さり、天竜掘川を締め切つて、合流する付近の小沢川を二筋に分流する工事をして下さいました。このうち合流する付近の洲さらいをし、設計書にある掘川の危険なところには、村々で蛇籠を使って欠け止めを致します。工事が終わりましたので絵図面にして五か村の村役人や世話役が印を押し、村々で一枚ずつ所持し双方が絵図面と調査報告書に書かれた内容をよく守り、争いなど起こすようなこととはいたしません。後日のためにこのように論文にしました。」

図面に天竜川とあるのは、嘉永元年以前、文化年間以後

の川筋のことだと思われます。これを堰き止めるために蛇籠や牛杵を入れて沈床を作ったのです。しかし、幕末から明治初年にかけて大橋上の天竜の川筋が決定してくると、大橋下の川筋も再び旧天竜川筋の辺に落ち着いてきたものようです。そこで嘉永元年の天竜新掘川筋は、古町村や狐島村の耕地を対岸に残して決定されました。このことは、古町村地方絵図や市役所稅務課の古地図に残っています。

(二) 四日市場流失のこと

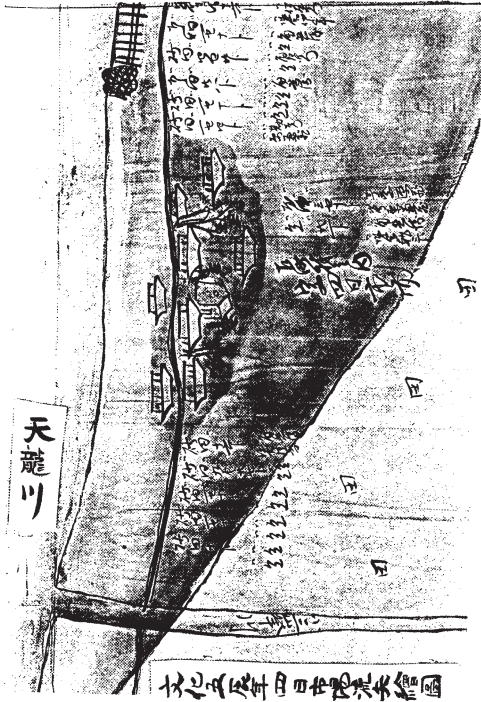


図-5 文化五年古町村四日市場流失絵図

文化五年の古町村出村の四日市場流失の絵図を見ると、大きな建物を中心にして八軒の民家がこれを取りまき、数本の大樹が描かれています。そしてこの土地の竿受として、源藏、角兵衛の二人が記載されています。竿受というのは元禄水帳作成のときには、すでに正式に屋敷を認められていたということで、そのうえ、この出村に馬市場を営んでいたものと考えられます。さて、中央区には馬に関する、馬場（馬を調教する場所）、ばくろう坂（博労といって馬の良悪を見分けたり、馬の病気をなおす職業）、市坂、四

日市場（馬市に関する地名）、競馬場（明治大正時代の南信唯一の競馬場で、今ではその跡地は県市営の野球場になっています）などの地名が沢山残されています。恐らく、昔の中央区は笠原の牧の出口を務めて、駿馬を為政者に送り、江戸時代には中馬・農耕馬などの駄馬の市場を業とする人達が住んでいたものと思われます。

文化五年の天竜川洪水で流失した四日市場の範囲は、今の秋葉様の辺りから古三峰川出口までの一帯におよび、その跡は、明治を経て大正年代にいたるまで、深い淵の

跡や荒れ川原を残していました。そしてその東側には、河岸段丘が作られていました。

昭和になって、建設省は河岸整備をかねて天竜川兩岸に補助道路を作り、右岸は、国道一五三号線のバイパスとして頻繁に自動車の通る道になりました。左岸の中央区側は、補助道路と河岸段丘の間の凹地を埋め立てて個人に分譲しました。現在は、秋葉町の第十四組から第十七組までの数十軒の新住宅や自営工場などが立ち並び、四日市場があったことなどまるで夢のようです。

(三) 古町、荒井耕地の水争い

天竜川堤防敷地壇断開発に関する上申書

(荒井区誌より)

上伊那郡伊那村之義者旧伊那村伊那部村福島村三村合併ニ候所従来伊那村伊那部村トハ天竜川ヲ隔テ村落ニ有之伊那村之内荒井耕地ト伊那部村ノ内古町耕地トハ天竜川旧流ヲ通シタル対岸中央ヲ以テ各□諸事關係を分ち負担仕来候処明治元辰年稀成洪水猶其後追々洪水ニ而兩岸堤塘等欠流自今ニ而ハ流水致居天竜川西岸字桜島荒井耕地江附属之堤塘敷猶天竜敷トモ川原ニ相成居り候 右場処江古町区人民□□□外九人私壇ニ田

形チヲ拵素ヨリ毫モ水用之權利無之小沢川ヨリ井堰ヲ設ケ荒井区民江無断ニ附属之堤塘敷迄開発之所業致ニ付荒井区従来之成跡喪失之已ナラス后患ヲ恐レ古町区民江掛合及候処不得止ヲ乱暴之行爲ニ出テ第一官庁江無願ニシテ官地ヲ壇断ニ工事ナシ古町耕地字野岸荒地ト交換之義ヲ唱期明ケ起返リ届上申致タル等の答之有之ニ付不取敢不当之義上申仕候右証明スルハ荒井区ニ於テ証拠物有之候間御尋之節ハ御一覽に供江委細可申上候 実地御臨檢之上古町区人民□□外九人御召出シ右開発地依然に回復致義御処置相成度図面相添此段願上仕候也

明治二十六年五月廿五日

伊那村荒井耕地

人民総代 熊谷角太郎

御子柴馬太郎

上伊那郡伊那村助役 中村万太郎

長野県知事 浅田徳則 殿

「上伊那郡伊那村は、旧伊那村・伊那部村・福島村の三村が合併したのですが、天竜川が真ん

中を流れています。伊那村のうち荒井耕地と伊那部村のうち古町耕地とは天竜川旧流を隔てて種々の關係を負担しあつてきましたところ、明治元年の大洪水で、兩岸の堤防は決壊し、西岸の字桜島荒井耕地に付属する堤防敷や天竜敷も川原になつてしまつておりました。この場所へ古町の人九人が勝手に田圃を拵え、もとより水利権もない小沢川から水を引き、荒井区民には断りもなく開発してしまつたので、古町側に掛け合いましたところ、乱暴に及び、官地を無断で開発して置きながら、古町耕地の字野岸荒地と交換したなどと唱え、田圃に起こし返して届けは済ませたなどと申しますので、とりあえずこれは不当であることを、上申します。証明するだけの証拠も荒井区にはありますので、お尋ねの時には御覧に入れ、詳しく申し上げます。實地にお調べのうえ古町区の九人を召し出され、右開発地を元通りに復旧するよう御処置下さいますよう凶面を添えてお願い申し上げます。

この訴え状は明治中期になつて、荒井耕地の人民が対岸

の古町耕地の人民の越權行為を長野県知事に訴えたものです。しかし、この川端の土地は前にも説明した通り、昔の天竜川筋移動によつて古町耕地の分として残つていた場所ですから、県としても訴えを採りあげずに、そのまま最近まで古町村の人達の所有であつたようです。

(四) 狐島耕地、荒井耕地の洪水後の申し合わせ

總計四千四拾八坪九分

内三千貳百拾壹坪九分七厘 狐島耕地

八百參拾六坪九分三厘 荒井耕地

去ル明治元年辰年稀成洪水ニテ天竜川筋大橋下通り小沢川ヨリ砂礫押出シ東端通堤防悉皆押破リ古町狐島田地并家宅等欠流シニ相成右両耕地之地中ヲ全ク天竜川通水致居今年ニ至ト雖モ水向悪クシテ堀川^{（堀）}切リ之手術目途モ不着從來之川跡原野之如ク全ク不毛之地ニ属シ候ニ付今般狐島荒井両耕地協議熟談行届該川敷實地検査之上都合ニ任セ前顯凶面之通分配致当分之内仮定仕候依之後年ニ至リ水行之向ニ依リ^{（堀）}切之見込相立チ候節ハ寛政元年為取替置候書面及文化九年之繪凶面等ニテ定メタル川幅之内ニ堀川可致其節者相互ニ故障ハ勿論聊タリトモ苦情申間敷候為取替證書両耕地

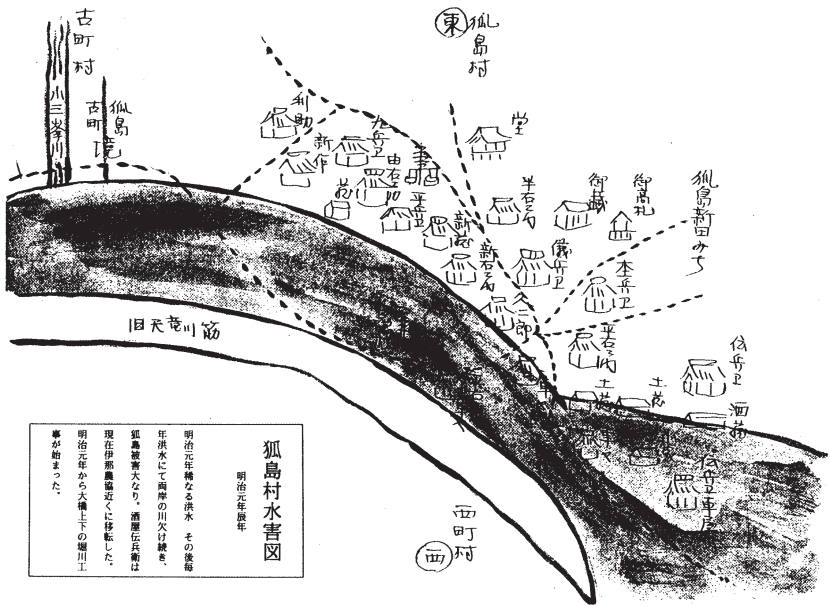


図-6 狐島村水害図

狐島村水害図

明治元年當年

明治元年稀なる洪水、その後毎年洪水にて兩岸の川欠け続き、狐島惣務大なり、酒原兵衛は現在伊那縣脇谷くに移した。明治元年から大堰上下の堀川工事が始まった。

連署仍如件

明治十三年四月

狐島耕地伍長惣代 北沢谷衛外十二人
 荒井耕地伍長惣代 久保村勝治郎外七人

「明治元年の稀な洪水で大橋下は小沢川からの砂礫の押し出しで天竜川東岸の堤防はことごとく決壊し、古町や狐島では田圃や家など押し流され、本瀬が耕地の中を通っていて、今年になってもまだ水の向きが悪く、堀川を切りの目途もたっていない。従来の川跡は原野のようになっていて、不毛の地となっていますので、狐島、荒井両耕地で話し合った末、実地検査のうえ、図面に表わしました通り当分の間仮配分し、後になって水向きの様子で切り見込が立ちましたときには、寛政元年に取り交した証文、文化九年の絵図面などで定めた川幅の内に堀川を致します。その時にはお互いに故障は勿論苦情は申しません。後日のために証文を取り交します。」

五、 殿島橋付近の天竜川筋

(一) 殿島橋付近の景観

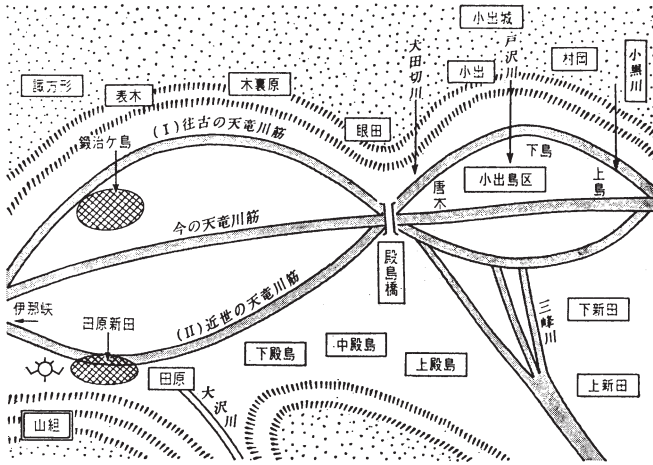


図-7 殿島橋上下流の川筋移動図—伊那市史より転載—

殿島橋は、西春近と東春近を結んで、更に富県線經由高遠町に通ずる交通上重要な橋ですが、天竜川西側の小出の段丘は、中世以前からの古道も通っていて、古い集落のあるところですが。この段丘下には小出島の平地があり、天竜川東側の広い沖積地には無数の治水堤防の跡があって、その間に田原・上中下殿島の集落が散在しています。

小出山からばた餅なげりや

田原殿島ひとひねり

西山から天竜川と三峰川の合流平野を見下ろして歌った伊那節の歌詞です。この平地の天竜川筋は、大きな三峰川の奔流と西山からの支流の押し出しによって往古から幾通りもの川筋を作っています。ここでは図7によって川筋をたどりながら氾濫の跡をたどってみようと思います。

(二) 小出島の氾濫と集落移動

小出島というのは、天竜川沿いのバイパスと村岡の段丘に挟まれた広大な平地です。ここは近代的な建物が沢山集まってきて新興の市街地になっています。この平地は昔天竜川と三峰川の二重の氾濫によって出来た平地なのです。前に古三峰川の氾濫史のところでも述べましたように、昔の三峰川は今の三峰川より北寄りの古三峰川を主流としてい

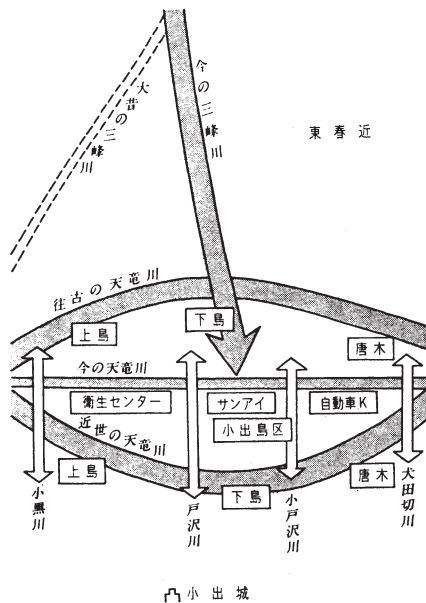


図-8 小出島の氾濫と集落の移動図
—伊那市史より転載—

たので、その押し出で天竜川の本流は伊那市西町村寄りを流れていたものです。それが小黒川・戸沢川・犬田切川の押し出しにあつて、東寄りに蛇行するようになりました。この小黒川・それぞれ戸沢川・犬田切川の扇状地の上に上島・下島・唐木の集落ができて農業や漁業を営んでいました。それから長い年月を経て、古三峰川本流が南に追われて今の三峰川筋が主流となつてくると、その押し出しによって天竜川本流は村岡の段丘下まで蛇行するようになりました。このようにして小出島の平地は天竜川と古三峰川、天竜川と現在の三峰川との関係から成り立った沖積地

であるということが出来ます。

江戸中期頃の天竜川筋の跡を小出区古文書や、聞き取りで調べてみると、文化四年には下島村古新田の大部分が流され、文化七年には天竜川と三峰川が合流して増水八尺におよび、甚大な被害が出ました。また次の文化八年未年と天保七年申年にも大洪水があり、上島村の橋本家の墓地にあつた墓石二基が段丘近くの流れ田という地名の所（JR飯田線の線路の近く）にまで流されて、水没の後が残っていたといえます。このことは、江戸時代の中頃には天竜川の本流が電車線路の近くを流れたことがあるという証拠になります。また、小出島の南端の唐木部落の田の中に川幅三間もあるような古い川筋跡が残っていますが、これは古い天竜川筋の跡のようです。この川筋は新築の小出島公民館の下で消滅していて、ここに「大川除災害復旧工事竣工記念碑」と「治水神社之碑」の二基が立てられています。これは耕地整理のとき小黒川出先の堤防上にあつたものを移転したものだそうです。

ここから上の平地には、小さな側溝がいく筋もあるだけで、立派な耕地整理ができています。この側溝の集まる所を訪ねていくと、「大川除田」という地名の所へ出ます。古老にこの辺のことを聞くと、「今は、ここに立派な護岸工

事ができていたが、その以前は牛棗や蛇籠を入れた水防の跡が残されていた。昔は天竜川と三峰川の増水が重なる度に小出島の被害は甚大なものだった。」と教えてくれました。昭和の初めに国と県とで大川除災害復旧工事をした際、灌漑用水は旧カゴメ工場前から取り入れて、サイフォン方式で小黒川の地底を潜らせて揚水するようになりました。これを大川筋または天竜筋といいます。この北端の除田取入口と南端の大川筋跡を結べば、旧天竜川の本流の跡が忍ばれます。

(三) 鍛冶ヶ島村の流失について

今から二百五十年前の享保の頃、天竜川の大洪水で鍛冶ヶ島村（かじがしまむら）が水没して、全戸が表木村に引き揚げたという記録が残されています。鍛冶ヶ島村とは下牧護災堤防（藤沢川砂利採集プラントから下牧の屠殺場に至る）と国道百五十三号線の間にあった村のことで、その一角には古くから鍛冶職人が住み着いていたといえます。当時の天竜川筋は東側の三峰川、大沢川の押し出しが強いので、その水勢は常に西寄りの段丘下に打ち寄せられて、下牧村下を流れて伊那峡に入っていました。現在でもその川筋を古川筋といっています。

殿島村大西家文書

享保十一年丙午年表木村枝村鍛冶ヶ島村新田家居迄不残流れ尽し立所も無之体 本村へ上り所々之野つれ
又は諏訪形 原之街道筋へ小屋がけ致 田地無之もの
共少々の卖家等致 一日を送り候 仕合無之惣而本村
共二困窮に及果候（以下略す）

この時の逆流満水によって、鍛冶ヶ島の民家全部と高千四百四十二石の田全部が流失しました。そこで、この人は親村を頼って表木村へ移住しましたが、本村も共々困窮したので、伊那街道へ小屋掛けをして、茶店などのその日暮しをしていました。またその内の何戸かは三峰川筋の青島村へ移住したといえます。

(四) 田原村新田の流失について

西春近村と東春近村の間には、天竜川筋のことで長い間水争いが続けられました。文化文政の頃からといいますが、藤沢川の押し出しが強くなって、天竜川本流は、殿島橋下から今の田原発電所の方向に流れるようになりました。そ

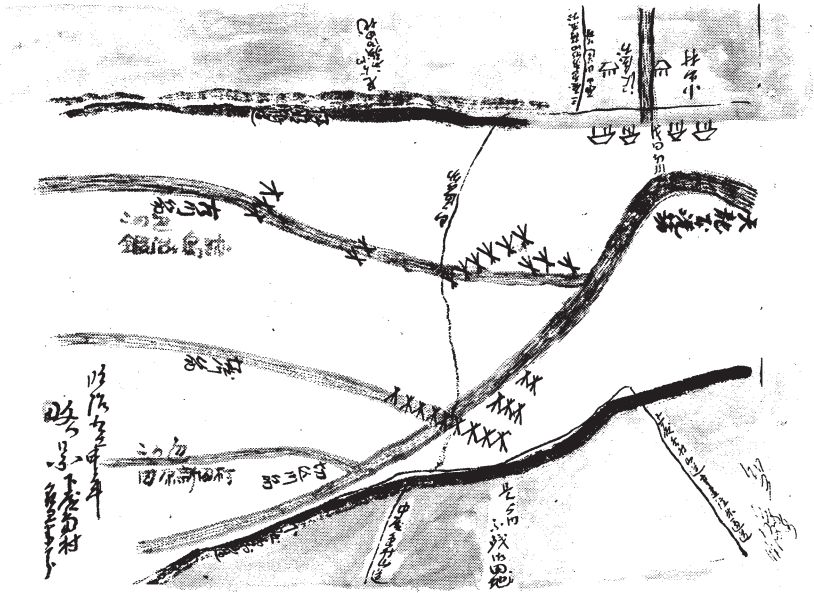


図-9 殿島橋下流の天竜川筋切込図(明治五年) 一細田明氏所蔵の絵図より作図一

れからの長い間に田原村薬師庵の下に大きな岩窟を作り、すさまじい流れが渦巻いて深い淵を作ってしまった。そうしてそこに膳椀淵伝説を残すようになりました。この淵は発電所の辺から薬師庵の下まで広がっていて、大正初期まで水泳ができたところだったといえます。

明治元年の洪水は特にひどく、大沢川の増水と天竜川の増水とが重なって、田原村新田の全戸が満水し、家屋二十戸、水田二十町歩余が流失したといえます。このとき避難した人のうち十戸が今でも薬師庵の裏山に住んでいます。この集落を山組と称して石垣づくりの住宅を構えています。

六、三峰川筋の移動について

(一) 三峰川扇状地のなりたち

ここでも結論を先に述べると、現在の三峰川筋は人為的に作られた川筋であるということです。すなわち人類が住んでいない洪積時代までの三峰川は、地殻変動と連続く大洪水によって伊那山脈を横断して伊那盆地へ多量の砂礫を押し出してきました。そうして北の六道台地から南の

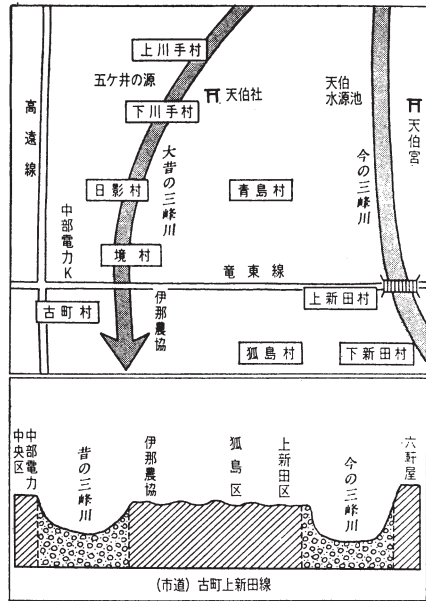


図-10 三峰川沖積地横断面
—伊那市史より転載—

桜井、榛原台地帯にかけて一大扇状地を形成し、さらにはこの上に御岳等の火山灰を厚く堆積しました。それから沖積時代になると、この扇状地の表面は三峰川の奔流と蛇行によって削り取られ、今日のような凹地形を呈し、平坦な沖積平野が成立したのです。三峰川本流は現在のように富巣台地寄りに固定してはいませんでした。その後この沖積平野に人々が住み着いて、上大島・下大島・上川手・下川手・青島・狐島・上新田・下新田などの集落ができて、これらの人々が長年月かけて沢山の堤防を作り、本流を最も南寄りの現在の川筋に固定させたこととなります。東部山地

の水を集めて流れ出た奔流は、新山川の押出しと高鳥谷山塊（新时期花崗岩の露頭）に突き当るので、この水勢は川手村の方向に流れるのが自然でした。

伊那市美篤誌によれば

昔は三峰川の奔流が対岸の桜井村天伯宮の岩壁につき当たって川手村天伯社の辺りに流れ込んで、大きな被害を与えていた。

上伊那誌民俗篇によれば

毎年八月七日に行われる天伯社祭の行事には、大人達の行う「御輿の三峰川越え」、子供達の行う「サンヨリコヨリ」などの珍しい行事が応永の昔から続けられている。

このことにヒントを得たので、三峰川沖積地の地形調査をして、この辺りに大きな低湿地帯のあることを突き止め、これが昔の三峰川主流の跡であろうと推察し、その証拠を川手村天伯社付近の低湿地帯、三峰川沖積地の横断面図10、古三峰川末端の景観の三点に分けて説明しようと思えます。

(二) 川手村天伯社付近の低湿地帯

美鷲の天伯社を中心にして、東に上川手村があり、西に下川手村の集落があります。この辺り一帯は清水や湧水の出るところがあり、裏河原・東河原・中島などと川筋にちなんだ地名が残っています。またこの辺り一帯は水位も高く市営水道の貯水池も設けられています（ダム建設後は地下水位が下がってだんだんに水量が不足してきている）。灌漑用水として残っている古三峰川も、ここが発祥地で、昔の三峰川本流の痕跡を残しています。

(三) 三峰川沖積地の横断面

昭和四十年ごろから始められた市道古町―上新田線の工事がすすみ、順次舗装道路ができてくると、中央区本通りから上新田区の三峰川堤防までの見通しがとても良くなりました。そこに、三峰川沖積地の横断面をはっきり見ることができま。それは伊那農協中央店の辺りから、中部電力社屋の辺りまでの二百メートルくらいの間が砂礫の低地帯であったことです。今でもその低地帯の中央に古三峰川の川筋が残されています。現在の三峰川の川幅も二百メートルくらいであることからすると、この古三峰川が往古の

本流であろうと推察できます。

この地帯に建設工事をする場合には、地下の深いところからも三峰川石が沢山に出てきます。

七、古三峰川の末端（天竜川と合流する地点）の景観

往古の古三峰川の押し出しは非常に大きくて、天竜川筋を西町村の春日城下まで追って、その水勢で今の西町平地

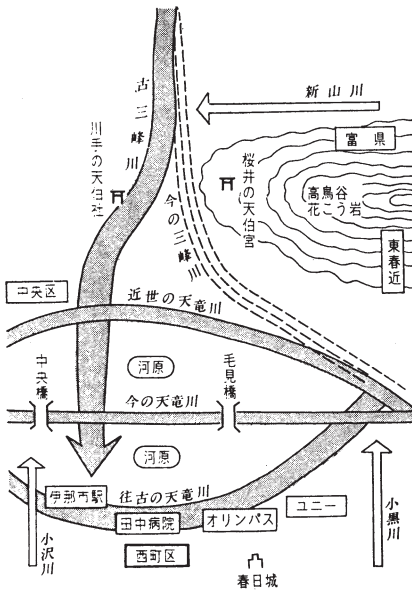


図-11 古三峰川の末端と西町平地
—伊那市史より転載—

が形成されました。最近出版された西町区誌を見ますと、その小字及び耕地の項に、蟹川原・上沼・上竜中・中竜中・下竜中・かご淵・川原・中川原・下川原などがあって、旧天竜川の氾濫跡が読み取れます。

次に、時代も下って古三峰川は小さな枝川となり、今の三峰川が本流となつてきますと、天竜川の本流筋は東側に寄つて流れ、古三峰川の作つた扇状地を分断してしまいました。天竜川支流が最も東側に寄つて河岸段丘を作つたのは、近世も文化・文政年間です。この段丘の上に古町村と狐島村を結ぶ古道があつて、この道から天竜川原を見ると大きな三峰川石が転がっていたことを覚えています。そして、太い楊柳が生えていて、鍬形虫を取つたり、兵隊ごっこをした場所でした。それは大正十年頃のことです。

葦の繁っている所に白濁した三峰川の水が静かに流れていて、天竜川の魚が沢山に上下していました。そんなに広がった古三峰川の川原も、河川敷の工事でせめられ、埋め立て事業によつて人家や工場が建てられて、昔の面影は全く見られなくなりました。

八、ダム建設後の三峰川筋の現況

さて近年、美和ダム・高遠ダムが建設されて、洪水の恐れから解き放たれた三峰川の沖積地は、各種の方面で目覚ましい勢いで開発が進み、住民に恩恵を与えています。しかし、その反面水涸れ状態はいろいろの困る問題を残しています。

ダム建設以前の三峰川は、所々に大きな淵もあつて、水泳ができ、砂地では甲羅干しの子供が遊んでいました。蛇籠の堤防では鰻釣りもでき、鰻（かじか）、鮠（はや）などがとれる楽しい川原でした。水の豊富な古三峰川は、上川手村・下川手村・日影村・境村・古町村の五ヶ村の灌漑用水で、五ヶ井といわれて魚も棲み、部落の使い水にも利用されていた大事な用水路でしたが、ダム建設以来、通水は計画配水になって、三峰川は水のない川となり、五ヶ井は水量が少なくなりました。

そのうえ、五ヶ井の沿線は水田が減少して人家やアパート、工場などが無計画に建てられて、その雑排水が処理されないままこの五ヶ井に流れ込み、昔の面影もないほどに汚染されてしまいました。

おわりに

天竜河畔に生れた私には、いろいろの思い出があります。幼少の頃の魚ふみ、水浴び、螢とり、草集めなどは、楽しい思い出であります。

雨期になると、毎年のように天竜川は増水して、支流からの流木と赤茶色の濁流は橋桁を洗い、非常に恐ろしい光景でした。これらのことは私の血肉となっていて、この歳になっても、天竜川沿岸の変遷についての関心はますます強くなっております。

最近では、昔と違って支流の防災ダム、河川の護岸工事、浚渫作業などの治水工事が盛んに行なわれていて、結構なことだと思っています。しかし、計画を誤ると天災より恐ろしい人災を招くおそれもあると思います。今後、行政者は、天災・人災の両面を考えて川筋を整えて欲しいと思います。

唐沢 和雄 (からさわかずお)

明治44年伊那市伊那部生れ

県下の小学校長を歴任して退職

現在 伊那市文化財審議委員会委員

中央区誌編纂委員長

共著「伊那市史」近世自然災害の項

昭和63年 3 月10日 発行

企画 発行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ヶ根市上穂南 7-10 〒399-41 ☎0265-82-3251
著者	唐 沢 和 雄	長野県伊那市中央区4931番地 〒396 ☎0265-72-5063
編集	(有)北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町高家5279 〒399-82 ☎0263-72-6061
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東 2-2-6 〒390 ☎0263-32-2263

表紙：レザック・つむぎ(こうぞ) 本文：書籍用紙70kg 本文：9ポ

「語りつぐ天竜川」の発行にあたって

天竜川は独特の河川形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしています。多雨域を後背地にもつ三峰川、小渋川、太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量に土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水の度に氾濫する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。

この天竜川の氾濫を鎮め水を高度に利用するための地元の長い営為の後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、それぞれ50年及び40年を経過しました。その間、地域の皆様から絶大なるご協力を賜り、以前と比べると天竜川の安全性は格段に向上いたしました。

しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめて、河川施設の整備運用や維持管理を図っていかねばなりません。

また、天竜川は地域の人々の情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んでまいりました。河川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水してしまっはなりません。治水利水について一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え実現していくことがこれからの課題であると思います。

私たちは、天竜川流域の自然立地・生態及び人びととの係わりなどについてより深く理解するよう努め、より知恵のあるものに仕上げたいと考えるものであります。

「語りつぐ天竜川」は以上の趣旨に基づいて、天竜川の治水に関する地域の経験や知見を収集周知し広く地域共通の知識とすることにより、よりよい天竜川を築いていきたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場でお考えを披瀝していただいたため、建設省としての見解とはならない場合があることを付言いたします。

今後とも天竜川の治水について皆様のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長 清治 真人

「語りつぐ天竜川」目録

1. 伊那谷の気象 米山啓一著
2. 天竜川上流域の立地と災害 北沢秋司著
3. 天竜川に於ける河川計画の歩み 鈴木徳行著
4. 総合治水の思想 上条宏之著
5. 総合治水と森林と 中野秀章著
6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 松沢 武著
7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 今村真直著
8. 村境は不思議だ 平沢清人著

(以上既刊・順不同)

9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 倉沢秀夫著
10. 諏訪湖の御神渡り 米山啓一著
11. 理兵衛堤防 下平元護著
12. 近世 天竜川の治水—伊那郡松島村— 市川脩三著
13. 川筋の変遷—天竜川と三峰川の場合— 唐沢和雄著

(以上発刊中・順不同)